

「基本的な生活態度の形成をめざす指導」の研究 (七)

|| 教師とM児の態度変容を追って ||



仏性とよ子・服部 馨
稲岡 百合・谷川 敬

M児について

昭和三十六年一月二〇日生まれ、生まれた時、未熟児として普通の乳児より長く病院で生活していた。二年年少組に入園する時も、主治医から一年おくらせるように指示をうけたが、母親のたつての希望で、去年年少組に入園した。入園当初から母親がつきつきりで傍をはなれず、担任教師にもついていこうとしなかった。園長が夏休み中より遊戯治療をつづけ、二学期三学期とつづけてきたが、母親におくられてくるM児、三学期中頃になって、ようやく園長とのラポールがつきだしてきた。その頃担任が迎えにいき、手をさしだすと、むりに母親のかけにかくれ、ひきはなされる時のスリルのようなものを味わっているように笑いながら逃

げたりしたこともあった。担任と園長とは少しずつ気持をゆるしているかのようにみえてきたが、その他の組の教師には全く、貝がかたく口を閉じたままで、とりつくしまがないままに、二年長児となった。

M児に対する教師の感情

今年の四月、年長児としてM児をむかえた教師は、年少組の時園長に遊戯治療してもらっていたM児をさほど気にせず、年長児らしく育てていこうとかまえた。少し年長児らしくないところが見えると、教師はあの子は頼りない、どうしてああなのだろう、二年目というのに、はきはきせず甘えているのだろうと、M児に対して嫌な子といった感情をもち、一日二日の欠席があると

何か教師自身にほっとしたものがあつた。登園してくるとやはり、M児が気になり、それでいてどのように接してよいかわからなかつた。そうしてM児がベンチに腰かけているようすや教師をみている目までいやでいやでたまらなかつたのである。

教師の気持としては黒白をはっきりしたいという思いがつよく動くため、M児の場合もいやだと思ひ出すと、何もかもいやな面が目について仕方がなく、あの子はあのようにしかできないのであろう、同じ年長児に比べればおくらしているのだらう。そしてM児自身も劣等感をもつてあのようにしか動けないのだ、またM児の方からも教師へなんの反応もしめさない、ちよつと声をかけてみても、だまって、そしらぬ振りをする、そんなようすがたまらなくてM児を憎らしくさえ教師に思え、教師はこのようなM児をどうしてやろうとする意欲もなく、どのように指導していけばよいのか全く自信がもてなかつたのである。このような時園長からM児の中に自主性の芽生えがどのようなにして、どんな時に、どのような育っていくかについて、実践研究をしてみてもどうかとすすめられた。M児の存在が非常に気になつていた時でもあり、教師自身の指導力の可能性を試す意味からも、積極的にM児に取り組んでみることにした。正直にこの時の教師のM児に対する心境は、二年目であるのにまだ何もできない、何をなしかけても、だましている、他の子どもと同じようにさっさとしてくれればいいの

にいやな子、といった感情であつたし、積極的にM児に取り組むには非常な勇氣と努力を覚悟したのである。

(一) 教師・二年目だから何とかなるだらう
M児・年少児当時そのままの姿

事例(四月二十七日)

M 児	教師	教師の気持
(廊下に並べてある机にもたれている)	Mちゃん おはよう(と近づく)	・一人でいる。声をかけてみよう。
(だまって教師の顔を見上げ、教師の足をける)		・にくらしいことをする子だなあ。

(考察)

・こんな所で机にもたれて何をしているのだらう。あそべばよいのに！。

・年長児だというのに、新入園児みたいになっている。甘えているのだらうか。

・足でけるなんて、なんてにくらしいことをする子どもだらうと、

- 教師自身がM児に反発を感じた。
- ・年少児の時、教師が受け入れてやることばかりして、自分からしようと思わないでいるからだろうか。
 - ・何をしてもいいと思っているのだろうか。
 - ・年長児であるのに、こんな生活態度でいいのだろうか、けっしてよいとは思えないのだが。

事例（五月十七日）

M 児	教 師	教師の気持
<p>(廊下に出してある自分の椅子に腰かけている)</p>	<p>(M児の椅子をもちながら) この椅子、お部屋の中へ持っていくけれど、Mちゃんも、お椅子といっしょにいきましょうか。</p>	<p>・自分の椅子に腰かけることにより安定しているようだ。</p> <p>・椅子が部屋の中だと不安らしい。</p> <p>・廊下の方がいいらしい。</p>

<p>うん(たてに承知の首をふる) (教師のおいたところへかける)</p>	<p>じゃ、いちばんはしっこへおきましょか。</p>	<p>・部屋にM児になじめないふんいきがあるのだろうか。</p>
---	----------------------------	----------------------------------

(考察)

- ・自分の椅子に安定をもつことは、入園当初当然と思われることである。M児は二年年長児であるから、普通ならば椅子どころか、園全体に安定していると思いがちである。ここにも、年長だからといった一線をひくことが、個人を大切にといったところからみれば、かけはなれたことになるのではなからうか。
- ・自分の椅子以外は、まだまだM児にとって不安定なものばかり、やっと安定を自分の椅子に求めた時、教師が表面は椅子といっしょだったが、部屋の中へ誘い入れようとした。させようとした気持に、大いに抵抗を感じたのではなからうか。
- ・椅子に安定を求め、その他のことにはまだまだ不安定なのだと思えながらも教師のあせりから、何か年長児らしくさせたい、という思いが抵抗となって、不安定な気分を何時までも、子どもが持ちつづける結果となったのではなからうか。

教師の態度

この頃の教師のM児に対するいつわらぬ感情は次のようであった。

M児は二年生長児であるから、これぐらいはできるはずだ。できないのはM児の能力が乏しいからである。皆といっしょにしないというのは、結局することができないのだろうと。われわれは今まで無理じいすることはいけない、子どもをまず受け入れることが大切なのであるといってきたのである。このようなことを勝手な解釈？をして受け入れたことが、M児の毎日の変化のない状態に対して、教師自身を無感にさせていたのである。

教師を見るM児の目がにくらしく、子どもらしくないように思え、M児が担任の子どもでなかったら、どんなに晴々するだろうなどと、思うべきことでないかわかっていながらも思えてくるのである。

反面、次のようにも考える。この子どもは、自分の組の子どもである。自分は、その担任である。この現実からいくら逃げ出そうとしても不可能なことは、わかりきっている。この複雑な思いを教師は、常にM児に、この責をおわせたのである。

(二) 教師・年長児といった枠にはめようとした
M児・そのことに抵抗と負担を感じていた

事例（五月二十七日）

M児	教師	教師の気持
<p>(M児ベンチにこしかけたままじっとしている)</p>	<p>Mちゃん〇〇先生にお電話かかっているの、呼んできてね。(なかなか〇〇先生がこられないので出ていく)</p>	<p>・いそいでいたのでM児ではいけるかなあと思ったが、よびかけた。 ・周囲に他の子どもいないことも幸いであった。</p>
<p>(口をとがらして教師の顔をみる)</p>	<p>Mちゃん呼びにいつてくれなかったの。</p>	<p>・呼んできそうもないようすを感じた。 ・本当に知らなかったのかな。M児なら知らなかったかもしれない。でも知って</p>
<p>ああ、Mちゃん、〇</p>		

(大きくうなずく)

○先生知らなかったの。

いて呼びにいかかったのではと思えたが、思いたくなかった。

そう、知らなかったの、○○先生は、緑組の先生よ、おぼえておいてね。

・二年年長児として何かいいたい気持ちがある。

(考察その一)

・M児がどのように動いてくれるだろうか。とにかく動いてほしい。

・呼んできそうもなさそうだが、年長児だからやれないはずはないだろう。

・周囲に子どもがいらないから、他人を意識せず、動くことができるよい機会があったと思っただのである。

・じっとして動こうとしないM児をみた時、これ位のことかなぜできないだろうと思った。

・年少児で大事にしてもらい、自分のことはおろか、まして他

人のことをするなど、もってのほかでも思っているのだろうか。

・教師は、M児に用事をいつけたりして、自分が呼びにくくでも思っているのかと、目でいつているようにも思えたのである。

(考察その二)

・ろうかをのぞいてみると、M児だけがベンチに腰かけていたのでちょうどよい機会だと思いい、教師を呼びにいかせることにしたが、予期通り呼べなかった。最初からどうかなと思った教師の心をみぬいたようにじーとしている。これをみた時、二年年長児としてこれでいいだろうか、やらせるべきだろうか。年長らしくないM児の態度に、教師にはいらだたしさがあった。

・Mちゃん、○○先生知らなかったの、といった言葉にすぐわれたように、大きくうなずいたM児を素直に受けとってやりたい気持ちとともに、知っていたのではないかと強い疑いをも抱いたが、結局、M児を信じてやりたい教師の強い気持ちが動いた。

・最後についた教師の言葉、おぼえておいてね、は意味がなかったと思える。知っていたら呼びにいってくれたのね、といった方が適切だったのではなからうか。

・こういうよりも、助言はこういう方が適切ではなかったかと思った時、その場その時に適切な助言が素直に出るような教師

でありたいと思う。教師自身が子どもをそのまま信じることで、素直な子どもの心を曲がって考えたりする教師のパーソナリティーの方に問題があるのではなからうか。

教師の態度

M児と接する教師は、M児を二年生児であるから、これくらいのことできなければと思ったり、早く皆と同じようにあそべばよいのに、他の子どもはさっさと自分のことをしているのに—といった思いがM児に負担をかけていたようである。教師はM児の人格に接しては、二年生児といつた枠ぐみ、尺度をもってM児に接してはいたのである。このことがM児に抵抗となり一層不安定な感情にさせ、ますます動けなくさせた。

このことを教師はつよく感じたのである。

事例（六月十一日）

M児	教師	教師の気持
(皆が部屋の真中に集まっても知らん顔)	(子どもとの今日の遊びの話し合いをす)	・M児を気にしなからしばらくようすを

をして椅子に腰かける) (うなづく)	をみてはいる)	みようとしたい、話し合いを続けた。
(この時、列の中から男児、M児の手を引きにい)	(帰る歌をうたいだしても、そのまま椅子に腰かけている。黙ったまま教師の顔をみている)	・Mちゃん、いらっしやいな。お歌をうたってから帰ろうね。
(この時、列の中から男児、M児の手を引きにい)	(呼びびに出た男児もこの場へかえす)	・Mちゃん帰るんだらからこちへこないと帰れないのよと口には出さなかったが教師のあせりが心のなかにあった。
(この時、列の中から男児、M児の手を引きにい)	(呼びびにきてくれたらいくといった習慣をつけず、自分で行動させたかった)	・皆といっしょにすることよりも、M児自身が動こうとするかどうか、気がかりになった。

<p>(M児の目が赤くなる)</p>	<p>Mちゃん、かえろうね。ひとりでごっこへこられるね。</p>	<p>で、友だちの誘いをとめた。 ・自分から動いたのではなく、教師や友だちの誘いかけによって動いたというよりも、帰りたいという気持がM児を動かしたのでないだろうか。 ・何かM児の行動は自分から動いたようにみえたが、実際は帰りたいのでその順序として立ってきたのだろうか。教師の気持がすつきりしない。</p>
--------------------	----------------------------------	--

(考察)

・この頃になってもM児はまだまだ動きだそうとしない。教師のこまかい心づかいと気分をほぐす話しかけによって、時にはや

っとの思いで動きだせても、こうすることがこのM児にとって
 は、精一杯のようである。

・最初教師はこのM児が二年生年長児であることにこだわり、二年
 目なのにこれくらいのことができないといった、いらだちの気
 持が強かったのはたしかだ。そこで、どんなにこまかい心づか
 いや、やさしい話しかけがあっても、その奥の教師のいらだつ
 た、こんなことくらいできない、といった思いが隠されていた
 のでは、M児にとってはやはり、素直になれないのではない
 か、と教師が気付いたのである。

M児の態度

四月、M児は年長児でありながら、新入園児のような不安定
 さがあり、教師をも近づけまいとし、教師をしりぞけかけて
 いるようにさえみえる。教師が年長児らしく、年長児らしく
 と思えば思うほど、M児はその教師のいらだちに対して、か
 たくな態度となつて、自然な動きを見せない。廊下のベン
 チをよりどころにして、じっとしてしまっているのである。
 年長児らしくさせたいと思う教師の思いがかえって、不安定
 なM児を一層不安定にさせ、つよく自分のからにとじこめさ
 せてしまわせているのであろう。

(大津市立大津幼稚園)